

多摩デポ通信 第49号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2019年1月23日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一-三二-一八

HP <https://www.tamadepo.org/>

E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

年頭にあたり

大先輩から
いただいた言葉を胸に

理事長 座間直壯

昨年は「災」という文字に代表されるように、様々な地域で自然災害に見舞われ、多くの図書館でも大変な被害を受けました。長い年月をかけて構築してきた貴重な図書や資料が汚損したり失われたりしてしまいました。

一冊でも多くの資料を活用のために保存を願って活動を続けている私たちに

とつても大変心痛む思いでした。今後も復旧・復興の支援要請に協力していききたいと考えています。

今年私に届いた図書館界のある大先輩からの賀状に、次のような言葉が添えられていました。「正に図書館は冬の時代ですが、この次のために準備の時でもあります。多摩デポのお仕事は次の時代の支えです。有難いことです」と。

多摩デポのことをこのように考え、応援していただいている方がいらっしやいます。きっと他にも同じように考えておられる方々がいて、それらに支えられて

この多摩デポは存在しているのだと思います。

今年も、多摩デポ講座や多摩デポ通信などいろいろな機会を通じて発信し、図書館における資料保存は資料提供の基本であることをあらためて考えていきたいと思えます。

さて、この号にも活動の近況記事が掲載されていますように、多摩デポ発足当初に計画していた共同保存図書館の実体は未だ実現していませんが、多摩地域の図書館を結んだバーチャルの世界で、必要な図書(多摩地域での最後の1〜2冊)の共同保存化をすすめる足がかりができつつあります。ただし、この実現には多摩地域の公立図書館との連携・協力関係が不可欠であり、各図書館が抱えている資料保存の課題解決に向けて共に取り組んでいくことが肝要と考えています。

□ 今号の内容 □

- ・年頭にあたり 座間直壯
- ・今年の抱負 吉本龍司
- ・第34回多摩デポ講座 武蔵野美術大学
美術館・図書館見学会 報告・感想
(西巻悦子・加山菜穂子・村上篤太郎)
- ・永江朗氏のブックレット新刊を読んで
外池佑价
- ・共同研究定例会報告 その16
- ・ホームページのサーバー変更について
- ・東京都多摩地域公立図書館大会案内

今年は同一図書のチェックの機能・精度をさらにレベルアップして充実したものに仕上げたいと考えています。
ご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



2019年を迎えて

今年の抱負

吉本龍司

(株)カーリル代表

新年あけましておめでとうございます。

今年は、多摩デポとカーリルが共同研究を開始してから、早いもので6年目を迎えます。昨年は、多摩デポの皆さんとの共同研究が一層加速した年だったように思います。

ラストワンの確認作業を効率化するために共同開発を進めている多摩地域公共図書館蔵書確認システム「TAMALAS」は、1冊ずつバーコードを読み取ってラスト1、2の本かどうか判定する個別処理システムに加えて、エクセルファイルをまとめて処理することができると一括処理システムの運用を開始しました。

是非ご活用ください。

この共同研究は、私たちが図書館の考え方を理解し、議論しながら、技術開発に落とし込むうえで欠かせないプロセスとなりました。

すでに図書館でコンピュータが活用されるようになってから半世紀が経過（アメリカ議会図書館は1970年頃にシステム化されたそうです）しており、当初の設計ポリシーや、やりたかったことも曖昧になっていきます。これらを再確認し次のステップにつなげていきたいと考えています。図書館システムには多額の費用が投下されているものの、なかなか本質的な議論はされないまま、惰性の運用が何となく続いていきます。このような状況は、予算があるうちはまだよいものの、遠くない未来において破たんしてしまうでしょう。この時、図書館の機能

を維持し、発展につなげていくためには、図書館員と技術者の主体的な議論が欠かせません。そのような観点からも、この取り組みがより一層発展することに期待しています。

2019年に取り組むテーマとしては、ISBNのない資料の支援ツールが挙げられます。従来のTAMALASではISBNのある資料の効率的な所蔵調査に主眼を置いていましたが、今後はより幅広い資料への対応方法を検討する必要があります。ISBNのない資料を扱う場合、各図書館が分散して整備した目録情報の紐づけをどのように行うか。つまり「総合目録」の議論を避けて通れません。しかし、国内における従来型（より大きいどこかの組織がコスト負担するもの）なトップダウンによるものや、GENIEのように各図書館

で分散してコスト負担するものなど）の総合目録の整備は進んでいません。このような状況の中で、現実的な総合目録の整備方法についても議論を深めていければと思っています。

特に（勝手に）期待しているのが、多摩デポのような地域で広域的なNPOが機能することにより、図書館同士や自治体同士での合意形成を超える新しい取り組みが可能になるのではないかと考えています。

技術で解決することは技術で解決しながら、人と人の繋がりで解決する部分についても積極的にサポートしていきたい。

カーリルは、多摩デポとの共同研究の成果を全国の図書館員、ユーザーにフィードバックし続けていきたいと思っています。本年もどうぞよろしくお願いたします。

第34回多摩デポ講座

「武蔵野美術大学美術館・図書館」イメーゼライブラリー／美術館企画展」

見学会報告

11月14日(水)14時から17時近くまで、小平市内の玉川上水緑道の近くにある武蔵野美術大学付属美術館・図書館と開催中の企画展の見学会を行った。

2010年に新築された、美術大学に相応しい図書館と美術館の複合施設である。常に面白い展覧会が催されていて、そこだけは学外者も自由に入れる。行くのに少し不便だが、多摩に住む者なら時々チェックしておきたい施設である。

隣接している図書館の中はどうなっているのか。どういう連携・運営をしているのか。蔵書や書庫はどうなっているのか。

平日の開催だったが、呼

びかけに会員14人、会員外6人の計20人の方が集まった。わかる限りの内訳は、大学図書館関係5、公共図書館関係11、市民2、大学生1人など。

通常なら学外者には図書館は利用も含め入りにくい施設。ご配慮により丁寧な案内と説明付きで長時間たっぷりを見せてもらった。

参加した三人の方に充実した報告・感想をいただいたので、重ならないことだ



けを先に書いておく。

施設の見るべき点が多々あったが、この館には(書物・印刷・表現に関する本を集めた)ブックギャラリー、絵本ギャラリー、(展覧会図録を集めた)カタログギャラリーという(本についてのコレクション)があったことにも注目。

また企画展は、大学の研究プロジェクトの最終年度の研究発表だそうで、「和語表記による和様刊本の源流」と題したものだ。

中世以来の木版印刷本の数々を集め、展示していた。明治以前の日本の印刷の特徴は、木の版面板に1ペーシジ全体を彫り込む「整版」という方法が奈良時代から行われている。それが江戸時代には浮世絵版画や出版業の隆盛になって華開いたのは有名なところだ。

だがあまり知られていないが実は戦国末期から江戸

時代初期に、ほんの50年間ほど朝鮮や西洋の影響で活字を作り、それを組んで印刷していた時代があった。

研究プロジェクトはそこに注目し、(それも銅活字でも陶活字でもなく)木で活字を作って組んで刷った、謎の美本として有名な謡曲の「嵯峨本」の野心的な復刻本を展示していた。これは元のできるだけ近い木製活字を再刻し、復元して漉いた和紙に刷り、雲母を載せた表紙をかぶせて製本したというもの。(美術館での時間は閉館間際、やや時間切れになってしまった)。

参加者からは、「大学のホームページで施設内の様子は丁寧に情報発信されていて参考になる。それを事前学習してきたのだが、実物は案外こじんまりして重々しくもなく、どこか仮設的な質感などもわかった。蔵書に触れられ、利用学生の

様子も見られ、よかった」というようなことを聞いた。みな、楽しまれていたようだ。

遊び心満載の 快適な知の空間

西巻悦子

「美術館・図書館／イメージライブラリー」の見学会に参加しました。音楽大学の図書館は少し知っていますが、美術を研究する大学の図書館は初めてなので、仕事のやりくりをして出かけました。

そこは動画を見て持っていたイメージ・予想をはるかに超えるなんとも美しい、しかもなんとも快適な知の空間だったのです。遊び心満載で、思わず童心にかえってワクワクしました。

まず、玄関ホールを入ると高い木の本棚、いえ本棚

ではありません。デザインで設けられた壁なのです。これから本が入れられていくのか？まだ収蔵に余裕があるわってことね、という予想は見事に裏切られました。そこが楽しくて、クスツと笑ってしまいそうな空間です。

すぐ、二階へと続く大階段には、通路というだけではない仕掛けがありました。広い幅を活用して学生さんの作品が展示してあったのです。上り下りする人が足を止めて鑑賞していました。その姿も大きな額縁の中に入れてられた絵のように美しい景色になります。

二階の閲覧室は book forest だそうで、螺旋状に配架された書架の楽しいこと！足元を見れば羅針盤のような館内の分類表示、壁に掛けられた分類記号のオブリジェ、森を探索する楽しさにあふれています。

そして歩き疲れたらどうぞと言わんばかりのフォルムが素敵な椅子たち。どれも名品の椅子だそうですが出しやばりもせず、気品にあふれ、しかも優しい空間を演出してくれています。かけ心地も最高でした。

もう！この学生になりたい！と思わずにはいられない感じでした。まだまだ、鮮烈な思い出がよみがえるのですが、書くのはここままで私の心のアルバムの大切な一ページとしておきます。(大学講師／図書館情報学)



美術大学の図書館を 見に行く

加山菜穂子

今回の講座には、大学で履修している授業の先生からお誘いを受けて参加させていただきました。

私は現在、水害等で被災した紙資料の保存処置について研究を進めています。

博物館や図書館の被災事例を文献で読んだり、東日本大震災の対応についてお話をうかがったりするうちに、図書館における資料保存に興味をもち、司書の勉強を始めたところです。そのような中で、他大学の図書館（しかも美術館・図書館という複合施設）を見学できる貴重な機会だと当日を楽しみにしていました。

見学冒頭、図書館の外観を見てまず驚きました。ガラス張りの柱の内部に木製

の書架のような構造物が配置された何ともモダンな建物。館内に入ってさらに驚きました。柱が木製書架なのです（ちなみにこの柱は、上まですべてが書架として使えるのではないそう）。

武蔵野美術大学（以下、ムサビ）美術館・図書館のコンセプトは「書物の森」。この柱や二階の渦巻き状の書架は確かに森のようでした。あまりにモダンすぎて、慣れないと資料を探せないのでは：と不安に思いましたが、壁面や床の随所に案内表示がありました（床も有効活用できる！）。照明も素敵でした。LEDが普及しつつありますが、あの強烈な白色は無機質な感じがして私はどうも苦手です。ムサビの図書館は赤みがかった照明が多く、温かみがあった「書物の森」の雰囲気合っていると思いましたが。実際にそこで勉強した

わけではないので、勉強に適しているかどうかはわかりませんが、私にはいいです。

見学では、私の研究と関連して資料の保管・保存方法にも注目していました。ムサビの図書館では書架の奥に本をそろえて排架しているように感じました。

私の通っている大学の図書館をはじめ、公共図書館でも書架の手前に本をそろえる館が多いように感じます。書架の手前に本の背がきちんと並んでいるほうが本は探しやすいのかもしれませんが。しかし、形や大きさが様々な美術関係資料が書架の多くを占める場合にはあまり意味がないのでしょうか。（そもそも書架の奥行に収まらない本がある。）それとも、地震等の揺れによる落下被害を見越してなのででしょうか。分類や配架の関係上避けられないのかもしれないが、美術関係

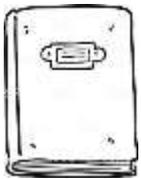
の本は大型本でも書架上段に排架してあり、落下してきたら危ないだろうと思われました。

このような大型本は書架の奥にそろえたほうが、揺れが発生した際に、資料に対しても、人に対しても被害を軽減できるのかもしれない。

まだ司書の勉強を始めたばかりの私の感想なので、図書館に詳しい方々にご教示いただきたいです。

今回の講座では多くの発見があり、また疑問も生まれ、収穫の多いものとなりました。今後、いつそうの勉強に励みたいと思います。わかりやすく丁寧な案内をしてくださった方々に感謝申し上げます。

（東京学芸大学教育学部）



美術館と図書館の機能をユニークに演出

村上篤太郎

初めて多摩デポ講座に参加した。これまでも何度か参加したいと思っていたが、今回、やっと実現でき、しかも感動を得られたので、とても満足している。

私はこれまで二つの大学図書館員として合計約30年のキャリアがある。勤務し

た大学図書館は、主として人文社会科学系三館、医学系と看護学系各一館の合計五図書館であった。そのため、これまで美術系の大学図書館の見学にはご縁がなかったが、最近博物館・美術館、図書館、文書館との連携 (Museum, Library, Archiveの頭文字をとって) M L Aに関心があるため、今回は美術館・図書館という名称からして、見学前から期待を膨らませていた。

見学当日は、秋晴れの最高のコンディションの中、武蔵野美術大学美術館・図書館 (以下、同館) のスタッフの方に、館内の案内をしていただいた。同館は2010年に開館し、コンセプトは「書物の森」である。真新しさの余韻を残しながらも、同館の名称が示すとおり、建屋の随所に美術館の要素が取り込まれてあった。外観からして大きなガ

ラス張りに圧倒され、同館内の床から天井までそびえ立つ温もりが伝わる木製の書棚が見え、さらなる情報との遭遇に誘われるような自然と入館したい気持ちにさせた。

同館では「空の書棚」と称して、壁だけではなく、通路、柱などにも書棚がびっしりと設置されていた。実際に図書等が排架されているのは、もちろん手が届く高さまでであり、デザイン化されたコンセプトの中で有機的に結び付いていた。一階は「研究フロア」である。三種類のギャラリースペースにコレクションを「見える化」していた。本についての本として、印刷、造本などの本を収集している「ブックギャラリー」、絵本を歴史的成り立ちや視覚表現の視点から収集している「絵本ギャラリー」、(国内で有数の規模を誇る)展

覧会カタログを収集している「カタログギャラリー」である。いずれも美術大学ならではの選書方針によるコレクションであった。

二階は「学習フロア」である。一階から上がった場所、隣の建物から入った場所の二か所がこのフロアへのアクセス地点であり、二か所の床には長さの異なる矢印が10本、それぞれの先には「0」から「9」のいずれかの数字が、その地点を基点として全方位に向かって示されていた。同館で



は日本十進分類法(NDC)を使って主題分類をしているため、これらの数字はNDCの百区分であった。これによって、その地点から各主題の資料が排架されている書架の方向を一目瞭然で示している。その際、その地点から書架までの距離感を矢印の長さで示し、短ければすぐ近くであること、長くであることを示していた。このようなユニークなサインには、美術大学のスマイルさを感じ、心の中で「あっぱれ」「ガッテン」と叫んでしまった。

なお、二階の書架は、渦巻き状の低書架として配置されており、書架をめぐるだけでも思いがけない資料と遭遇するオーラを発していた。

地下一階は「保存フロア」であり、雑誌のバックナンバーや発行年の古い図書な

どが、自動集密書庫や固定書架に排架されている。自動集密書架は、上半分が透明になっており、排架されている資料の様子を窺うことができた。保存というスペースにも「見える化」をさりげなく演出しているところに、スペース全体を明るくするデザインの力を感じた。

なお、固定書架の側板には、排架されている資料のNDC分類の案内掲示がついている。二種類の色が使われていたのは、NDC7版を使って分類作業をした時代と9版を使って分類作業をしている現在とで資料を分けて排架していたからであった。例えば7版では702・06の分類は近代美術(19世紀)を意味し、当時はここに現代美術も含めて運用していた図書館が多いが、9版では702・07の分類が現代美術(20

世紀)と新たに独立したことから、敢えて資料を合体することなく、並置しているものと思われた。

そのほか、同館の一階と二階をつなぐ階段の横が、普段であれば利用者が腰かけて読書をしたりすることができると階段状のエリアとなっており、見学時は学生の作品展示場所となっていた。

また、館内には様々な素敵なデザインアズチュアがさりげなく置かれている。教科書でしか知らないデザインナーの作品が、利用する椅子として設置されているのは、美術館としては活きた教材となっている。同館の隣の建屋にあるイメージライブラリーの入口前には椅子ギヤラリーもあり、多くの椅子が展示されており、授業で利用するときもあるということだった。

このように同館は美術

館・図書館として、美術大を象徴する各種デザイン、図書館としてのギヤラリーコレクション、美術館としての椅子コレクションや作品展示の会場など、美術館と図書館の機能を十分に発揮したすばらしい館であった。

充実した時間を過ごせたのも、案内をしていただいた図書館の方々、企画していただいた事務局の方々のご尽力のおかげであり、感謝する次第である。

(慶應義塾大学
塾監局参事)



ブックレット新刊
「『図書館の「捨てる」と残す』への期待と不安」――出版産業の危機の中で／書き手として、利用者として」
(永江朗著) を読んで

外池佑价

この本に触発されたことをいくつか書いてみよう。

冒頭で著者は、京都市立図書館の桑原武夫コレクションの廃棄問題を取り上げ、これを「今の図書館の現状を映している象徴的な事件」だといひ、さらに「図書館の資料について、残すか除籍するかを誰がどのようにに決めていくのかがよくわかりません」ともいっている。

この問題に関してには私も思い当たることがあった。じつは国立市でも、三年ほど前に図書館の資料の大量廃棄問題が起きている。

Tさんと私は図書館協議会の元委員でもあったので、除籍リストの公開請求をしたうえで、連名で図書館長あてに質問書を送って何回かやり取りをした。

その結果わかったのは除籍の根拠のあいまいさで、おもに近年利用されたかどうかと発行年の古さを基準にしており、蔵書構成への配慮がほぼ欠落していることであった。基本図書という概念があるのかどうかすら疑わしく思えた。

この問題は、除籍後の資料のリサイクルが行われなかったことも相まって、市議会でも取り上げられ、図書館はそれなりの対応を迫られることになった。しかし今も、一利用者として図書館運営への不安はなくなっていない。

この本で著者は、資料の収集についても「どのような方針をもって収集するの

か……充分議論しないまま個々の図書館が動いているのではないだろうか」と疑問を呈している。だが著者は図書館員の資質を問題ににしても、図書館の選書のあり方には踏み込んでいない。

私が今いちばん不安を感じているのはその選書のありようである。最近では、利用している図書館にこれがない、あれが入っていないとよく仲間うちで言い合っている。

津野海太郎氏も『読書と日本人』（岩波新書／二〇一六年）の中で、地元の図書館のウェブサイトの「新着資料一覧」のページを一瞥し、仰天させられた経験を語っている。そこに見出したのはハウツー本や実用書などの山で、氏のいう「かたい本」はほとんど目に入らない……。

これはいまではどこの図

書館でも起きていることなのではないか。ここから思い起こすのは、多摩デポの堀渡さんが一五年ほど前の全国図書館大会で話されていたことである。

堀さんは講演の中で、図書館の「蔵書構成をつくり、蔵書による知の体系や棚作りのピラミッドを作っていく」というようなことに関しては、なかなか全体状況は暗い（と感じていて、図書館員の側から見ると）「利用者との関係が……同じものを土俵にしているとは言えなくなってしまうている」「教養的な知の共通土壌のようなものが……壊れていて、そこが共有できていない」と語っていた。

近年事態は進行し、利用者とのあいだだけでなく、図書館員にもこうしたものいいが通用しなくなっており、その結果蔵書はバランスを失い、賞味期限のごく

短い本ばかりが増えていく。これが多くの図書館の現状ではないだろうか。

もう一つはこの本の中で、永江氏が「読書離れ」は起きていないと語っていることである。氏はデータをあげてそれを主張し、説得力があるように見える。だが私自身の実感は「人が本を読まなくなった」とりわけ若い世代に「本離れ」が進行しているとみる『読書と日本人』の立場に近い。どちらが本当だろうか。

もし津野氏のいう「読書の黄金時代」が終わった（この見立てにも私は賛同する）のが真実だとすれば、「黄金時代」を生きた人間が退場していくにつれ、図書館のいまの趨勢は歯止めがきかなくなるのではないか。図書館の再生の端緒はどこにあるのだろうか。

（賛助会員）

(株)カーリルとの共同
研究定例会報告 その16

研究会では現在、二つのことを検討中です。

一つはTAMMALAS (多摩地域公共図書館蔵書確認システム)のユーザー調査です。現在、TAMMALAS一括処理システムは、三市から申請を受け、ID、パスワードを発行しています。またTAMMALAS個別処理システムは2016年5月から公開し、どの図書館でも使えるようにしてきました。

しかし、TAMMALASが図書館現場でどのように活用され、その有効性についてはどう考えられているかは、実は多摩デポにも把握ができていない状況です。そこで近々、利用の実態調査を行う予定です。一括処理システムを利用して

いる三市には聞き取り調査をしに伺い、個別処理システムについては全自治体にアンケート調査をお願いする予定です。その結果を定例会で検討し、今後の共同研究とバーチャル共同保存図書館の実現に役立てていきたいのです。

もう一つ、現在研究を進めているのはISBNが付与されていない資料(以下「ISBNなし資料」)の同定識別のことです。これについては(株)カーリルが、(まだ一般に公開はしていませんが)「多摩デポ統合検索システム」を開発してきています。TAMMALASではISBNをキーとして多摩地域の図書館を統合して検索しますが、この「多摩デポ統合検索システム」は、書名、著者等をキーとして各図書館の蔵書を統合的に検索することができません。

しかし各図書館で保持しているISBNなし資料の書誌データは、昔のカード目録から書誌を移したのももあり、各館で独自に書誌を作ったものもあって、検索してみると書誌割れを起している(本当は同じ資料なのに書誌情報は別々に出てしまう)ことがよくあります。したがって検索結果を出した後、書誌の同定をどのように行うかが課題となります。

このことはどんな分野の書誌にもはらんでいる問題ですが、特に各図書館ともに所蔵していて書誌割れしていることが多いのが地域資料です。まず地域資料の同定識別を進められないか。そこで「多摩デポ統合検索システム」を使って地域資料の書誌割れ実態をつかみ、その書誌割れデータを同定識別していくツールを考えたいです。

この取り組みから、①「多摩デポ統合検索システム」の有効性を検証し、さらに②書誌分れデータを同定して多摩地域でのラストワンツーツーを見つけやすくする。そうして改良した「多摩デポ統合検索システム」を公開して使ってもらえるようにしていきたい。

ただしこういうことは多摩デポと(株)カーリルの内部の研究だけでよい結果が得られるものではありません。図書館の地域資料担当の方の協力が得られればありがたいです。そうした点も考えながら研究しているところです。



ホームページのサーバー
変更について

多摩デポのホームページはサーバーを昨年12月末にさくらレンタルサーバーに乗り換え、あわせてセキュリティ対策を実施しました。これまで使っていたYAHOO!ジオステイーズが、年度内でサービスを終了することになったのに伴う対応です。

▼アドレスが左記に変更となりました。

新アドレス

https://www.tamadepo.org
(HTT P Sと、Sが付きました。パソコンの「お気に入り」などに登録されている方は、新アドレスに変更していただく必要があります。お手数をおかけしますが、ご確認ください。不具合があればお知らせください。)

▼GOOGLE等での検索キーワードはこれまでと変わりません。

平成30年度
東京都多摩地域
公立図書館大会

テーマ

地域に働きかける図書館
〈今考える図書館の役割
平成から未来へ〉

▼2月7日(木)午前10時

(受付:9時30分)

『地域に向き合う図書館
―その役割と課題―』

講師:山口源治郎氏
(東京学芸大学教授)

▼同日 午後2時

(受付:1時30分)

『市民と構築するデジタル
アーカイブ』

講師:坂井知志氏
(常磐大学コミュニケーション
振興学部教授)

▼2月8日(金)午前10時

(受付:9時30分)

『改正著作権法と図書館の
障害者サービス』

講師:佐藤聖一氏

(埼玉県立久喜図書館障害
者サービス担当司書主幹)

対象:図書館職員及び一般

の方(入場無料)

申込:一般参加者は不要、
当日会場へ

会場:東京都立多摩図書館
2階セミナールーム

主催:東京都町村立
図書館長協議会

問合わせ:
実行委員会事務局
武蔵野市立中央図書館
0422-515145

なくす。て
まされ載
もさを掲
今年催内
開催案お

今年度3回目の多摩デポ
講座は準備が遅れていま
す。同封できませんでし
たが、まもなくお知らせ
できる予定です。

出版危機が言われる中、
永江朗さんの『ブックレ
ット⑫』をどう読まれた
でしょうか?

次の多摩デポブックレッ
トが2本、進行中です。

★会の現勢

2019年1月23日
現在

●正会員

(個人会員83名)

(団体会員2団体)

●賛助会員

(個人46名)

(団体1団体)

●年会費

正会員(個人・団体)
五千元

賛助会員一口 二千元

(個人一口 団体五口以上)